The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	18世紀西ボルネオの史的研究 一学識あるサイイドから権力なきスルタンへ一
Author(s)	冨田, 暁
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69689
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　冨田　暁　）	
論文題名	18世紀西ボルネオの史的研究 ―学識あるサイイドから権力なきスルタンへ―

論文内容の要旨

本論文では、考察対象時代・地域として、18世紀西ボルネオを取り上げ、当地に到来したアラブ人サイイドが、現地で地位と権威を獲得していく過程を考察し、その息子が港市国家ポンティアナックを建国した過程とその展開、彼によって形成された王権を論じた。

第1章では、18世紀前半にハドラマウトから西ボルネオに到来したアルカドリー家は、親子二代に渡って現地社会の中で地位を築いていったことを考察した。従来の研究は、フサインのサイイド（アラブ人）性やイスラームの知識を利用した地位の形成には指摘するものの、その実態は十分に検討されてこず、フサインと現地社会との関係を双方向的に見る視点にも欠けていた。また、アブドゥル・ラフマーンの建国以前の活動に関しては、以前は見られた、アラブ人性を強調する研究から、近年は交易と海賊による勢力形成を重視する状況にあるが、交易・海賊集団のリーダーから、一国の君主へと変化する背景は、十分に検討されてこなかった。

ハドラマウト生まれである父親のフサインは、超自然的・神秘的力を所有するサイイドの血統、「正統」イスラームの学識と現地社会への融和的実践・普及、政治権力を自ら求めない姿勢によって、ライバルに打ち勝ちながら、現地社会に王族として「受容され」たり聖者とみなされたりするほどの高い地位と権威を築いた。それは、同時代の周辺地域で「正統」イスラームが広がる波が及びつつあった西ボルネオで、現地の君主・社会が、彼の資質・態度を自分たちにとって価値ある、適切なものと捉え、彼を選択した結果でもあった。

一方で、アブドゥル・ラフマーンの勢力形成は、父親とは対照的な過程を歩んだ。アブドゥル・ラフマーンは、フサインの息子かつ、君主の血縁者という恩恵を生かしつつ、交易と海賊という当時の現地の支配者層にとって身近な勢力形成手段であった方法を積極的に用いて勢力を築いていった。出自と海賊の高名がバンジャルマシンで彼に王族の地位を与えた。海賊行為は、富と武力を獲得すると同時に武名と実力を轟かせるに有効な手段であった。しかし、アブドゥル・ラフマーンが実力・武名・富を持った実力者として勢力を拡大するにつれて、現地の君主は彼を政治的ライバルと見なすようになった。別の見方をするならば、権力志向と実力集団を持たずにイスラームの権威として活動するフサインの存在は、現地の君主にとって有用であり、彼らに対する脅威とはなりにくかった。アブドゥル・ラフマーンはムンパワでの勢力争いの結果、自身の新天地を探す決断に至った。それは、アブドゥル・ラフマーン自身が君主となる選択であった。

第２章では、第1節で、ポンティアナックの展開を政治的・経済的な面を論じた。ポンティアナックは、カプアス川河口に近い好立地とアブドゥル・ラフマーンの巧みな勧誘と海賊からの保護を謳い文句として、建国後から発展を続け、西ボルネオの主要な港市国家として成長していった。

新興港市国家であったポンティアナックにとって、自国の発展と周辺のライバル国家との競合は不可分だった。アブドゥル・ラフマーンはライバルとの交易上の競合を勝ち抜くために、当初は自身の血縁関係を用いてムンパワとジョホール・リアウを味方に付けて利用し、後にはオランダ東インド会社を利用した。しかし、オランダ東インド会社が1779年にポンティアナックの宗主国となった時期には、商人への対応の不備とライバル国家の逆襲によって、かつてポンティアナックに集中していた交易は各地に拡散した。オランダ側と共同でおこなった、ライバル勢力の征服および、オランダ側が導入した交易の支配・管理は、どちらも両者の企図に反し、ポンティアナックの交易に利を成すことがなかった。アブドゥル・ラフマーンや当地の商人は、密貿易によってオランダ東インド会社の政策に対応した。オランダ東インド会社は不採算に苦しんだ結果、西ボルネオから撤退した。オランダ東インド会社による交易支配・管理が無くなったポンティアナックは、各地からの商人を惹きつけて繁栄した。西ボルネオ南部地域も再び興隆を始め、西ボルネオ地域全体の交易水準は上昇傾向にあった。扱う交易商品が変化したり、ペナン台頭の影響を受けたり

する中でも、ポンティアナックは西ボルネオで主要な港市国家・交易港としての地位を保ったが、その交易は衰退傾向にあった。

第２節では、アブドゥル・ラフマーン治政期を王権の変容に合わせて、四つの時期に区分し、それぞれ考察した。①ポンティアナック建国のさいに、アブドゥル・ラフマーンが建国の同志である最初の住民と結んだ建国契約は、アブドゥル・ラフマーンの治政期を通じて、徴税、兵役、賦役、後継者選出において彼の権力を規定し、規制する根底となった。それは、ポンティアナックの発展に連動して、自動的に強化されていくものではなかった。ダヤック人が領域内にいないことは、周辺の他の君主と比べて、アブドゥル・ラフマーンの地位と権力には不利に働いた。しかし、ムスリム住民・交易商人に付与された免税は、ポンティアナックに住民と交易商人を呼び込み、国家を発展させていく手段となった。新たに居住するムスリム住民とは居住契約を結び、お互いの権利と義務を明確化した。こうした政治的契約は、彼らがマレー世界に繋がる政治文化を共有していたことを示す。アブドゥル・ラフマーンが君主になるためには、サイイドおよびウラマーとして政治から距離を置いた父親よりも、現地の政治文化への対応がより重要となった。

②スルタンへの即位は、アブドゥル・ラフマーンの国内・対外的な実権力の強化に直接的には繋がらなかった。しかし、彼のスルタンへの即位は、ポンティアナックの有力者たちを、自身（スルタン）を頂点としたヒエラルキーの中に組み込み、序列化した。これによって彼は、建国契約で定められた、「同輩者の中の第一人者」という地位を超え、臣下より明確に上位の存在の君主としての地位・権威を獲得した。ジョホール・リアウのラジャ・ハジは、マレー世界で承認されていた権威と実力をもって、それらを主導・保証した。③オランダ東インド会社の進出は、アブドゥル・ラフマーンの地位や、彼による後継者選出を保証した。④オランダ東インド会社が撤退した後には、後継者問題が実際に発生し、ブギス人への課税も果たせないなど、アブドゥル・ラフマーンの権力は、建国契約と居住契約のもとに形成された状態を基本的に維持し続けていた。そうした彼の君主としての姿は、権力なき権威者といえるものであった。しかし、権力を行使できない君主だからこそ、そうした自由な場を求めて交易商人が集まったとも考えられ、権力なき君主がポンティアナックの発展を生んだといえる。

第３章では、第1節で、建国契約などによって当初から権力の制約を受け、スルタン即位によっても実質的な権力が増加せず、権力なき権威者というべき君主となったアブドゥル・ラフマーンが、ポンティアナックでどのような存在であったのかを考察した。第1節では、君主となったアブドゥル・ラフマーンが意識していた態度として、愛想の良さ、温厚、公正、寛容、気前の良さがあったことを指摘した。それは、彼が君主であるために配慮していたものであり、臣下・住民から要求された王の要件であった。そうした君主の要件は、ムラカ王国のものや、当時のジョホール・リアウおよびマレー半島から影響を受けていたことを指摘した。

第2節では、あるべき君主としての振る舞いに配慮していたアブドゥル・ラフマーンが、リスクを負ってまでも負債を重ね続けて資金を調達していた事実に注目し、その費用の意味を検討することで、権力なき権威者であった彼の、君主としての意味や役割を考察した。彼の負債の一因は、彼の収入源の少なさ、即ち権力の弱さに起因していたが、権力の弱さは新規住民や交易商人をポンティアナックに誘引する手段として機能していた。アブドゥル・ラフマーンには、収入で得られる以上の資金を、負債を積み重ねてでも捻出する理由が存在した。その費用の役割は、年々増加していった、彼の一族・郎党といった家内集団の維持、彼らと共に君主に相応しい生活を送る費用、ムスリム住民に対する権威保持のための費用、スルタン即位によって誕生した豪奢な宮廷費用、彼のもとに集う各地からの従属者やアラブ人食客の扶養費などであった。そのどれもがアブドゥル・ラフマーンの権威・威光を高めたが、同時に、一度得た権威・威光を保つためには、費用を調達し続ける必要があった。負債の増大と引き替えに彼が獲得・発揮した権威・威光は内外に喧伝され、それが新規到来者を生み、ポンティアナックの発展に繋がった。アブドゥル・ラフマーンは、ポンティアナックの支配者になる以前から、富の分配が人を集める効果を持つことを良く理解していた。小人口かつ人の移動性・流動性の高い地域で誕生した、新興港市国家ポンティアナックにとって、人口増加・維持の問題は、国家の生存・発展ならびに国家や君主の威光にとって、より重要な問題であった。即ち、負債（富）やムスリム住民・交易商人への免税（富の付与）とは、彼による自国の発展策であると同時に、負債を通じて得た権威・威光によって、彼が権威による統治を行なったと解釈しうるものであった。また、アブドゥル・ラフマーンがポンティアナックで示した、権威に特化した王権や統治のあり方が、東南アジア、海域東南アジア、マレー世界の国家（港市国家）における王権や統治のあり方と共通性・類似性を持つこと、そうした王権との比較に資する材料となることを指摘し、今後の課題として、ミクロとマクロ、双方の様々な枠組み・視点を用い、比較と関係性を考慮しつつ、更なる検討を進めていく必要性を挙げた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　冨田　暁　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	桃木　至朗
	副 査　大阪大学　教授	荒川　正晴
	副 査　大阪大学准教授	菅原　由美

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：18 世紀西ボルネオの史的研究－学識あるサイイドから権力なきスルタンへ－

学位申請者　冨田　暁

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　桃木至朗

副査　大阪大学教授　荒川正晴

副査　大阪大学准教授　菅原由美

【論文内容の要旨】

本論文は、アジア史全体でも東南アジア史でも長らく信じられてきた「停滞の 18 世紀」という歴史像の見直しについて、「辺境」とされ注目されることが少なかった西ボルネオという地域に着目し、アラブ人サイイド（ムハンマドの子孫）である高名な学者の子孫による港市国家ポンティアナックの建設・発展という事象を通して、新たな視角を提示しようと試みたものである。1730 年ごろから 19 世紀初頭までの時期について、オランダ語・英語やマレー語の史料を用い、３章に分けて建国の過程と成立した王権の特質を論述している。

序章では、海域東南アジア史において「停滞の 18 世紀」像を見直し、ヨーロッパ人だけでなく華人・アラブ人やブギス人などが作りだしたダイナミズムに注目する最近の研究動向を概観したうえで、ポンティアナックを建設したアルカドリー家を中心に西ボルネオの当該時期に関する研究史を整理し、国際交易や外来諸集団の動向の研究に比べて、現地社会側の視点が弱く、建国の具体的な様相も未解明な点が少なくないことを指摘している。

第１章「アルカドリー家の西ボルネオ到来と地位・勢力の形成」では、西ボルネオの地理・生態や既存の港市国家群の住民統治と貿易の特徴を紹介したのち、ハドラマウト出身のサイイドで、インド、スマトラ島、ジャワ島を経て西ボルネオに到来したフサインが、現地の信仰・文化が求める厄除けや航海の加護などの超自然的な力を見せながら、高い徳と学識を兼ね備えたイスラームの聖者として崇敬を得るにいたった経過をまず跡づける。次いで現地女性との間に生まれた彼の息子のアブドゥル・ラフマーンが、マレー世界で伝統的な、海賊活動による武勇の誇示と富の獲得などの方法で威信を高めた様子を描き出した。

第２章「港市国家ポンティアナックの建国と王権」では、父親以来の居住地ムンパワを離れたアブドゥル・ラフマーンが従来無人の地だったポンティアナックに移住し、そこに現在も西ボルネオの中心都市である繁栄した港市国家を築き上げていった過程を、周辺港市国家やオランダ東インド会社・華人などの外部勢力の動向、交易の変動と結びつけながら描き出した。そこでは、1771 年の「建国契約」でマレー人・ブギス人などのムスリムたちへの税役や非常時以外の軍役賦課権をもたない（他方、もともと無人の地だから、周辺の港市国家で主要な税役負担者になっていたダヤク人が存在しない）という「権力なき支配者」の地位にあり、華人への課税と自己の貿易以外に大きな収入源をもたないラフマーンが、オランダ東インド会社や海域東南アジアに権威をもつジョホール＝リアウ王国などの力を巧みに利用して権威を高め、周辺港市国家との競争でもしばしば優位に立った状況

などが明らかにされている。

第 3 章「権力なき権威者」では、以上のように権力に制約を加えられ収入源も十分ではない（貿易も後半には衰退気味だった）アブドゥル・ラフマーンが、「寛容・公正さ・気前の良さ」などマレー世界であるべきとされる君主像を演じ続けたこと、しかしそのために必要な儀式・祝宴の費用や一族・郎党・食客の扶養などが、ほとんど破産状態に陥るほどの負債を彼に強いたことなどが持っていた意味を考察した。筆者はそれを、移動性の高い小人口社会つまり人の支配が何より必要だが権力による支配は容易ではなく、人を権威や富の誇示によって引きつけておくことが存立の基本要件となる海域東南アジア社会に成立した権力の特徴であると解釈し、同様の条件をもつマレー世界の諸王権や、「劇場国家」「マンダラ」などの東南アジア国家論との比較を試みた。

終章では以上をまとめ、フサインとアブドゥル・ラフマーンがそれぞれの方法で現地社会の宗教や政治文化面の需要に応えたこと、後者が建設した王権が自己の権力を犠牲にした「権力なき権威者」であることによって、ポンティアナックに人々を誘引し地域の中心となるような港市の建設が可能になったことなどを述べ、より広い範囲での港市国家権力の比較史への展望を述べて論文を結んでいる。

【論文審査の結果の要旨】

言うまでもなく本論文の直接の貢献は、先行研究の少ない近世後期のポンティアナックと西ボルネオの状況を、明らかにした点にある。それは、在地の宗教・政治文化に焦点を当て、フサインとアブドゥル・ラフマーンが対照的な方法で現地社会での威信をかちえたこと、後者が「権力なき権威者」であったことがポンティアナックの発展・繁栄につながったことなど、興味深い論点の提出によって、「マイナーなテーマにおける単純な事実の解明」にとどまらない意義を主張し得ている。それらは交易史・海域史やアラブ人ネットワーク、港市国家論・劇場国家論など近世東南アジアをめぐる既存の研究枠組みを豊かにするだけでなく、中央ユーラシアのオアシス国家や植民地化寸前の近世後期にアフリカ・オセアニアなどで簇生した王権など、他地域の権力の理解にも、貴重な示唆を与えるものである。

本論文にはもちろん、物足りない点もある。分析する空間が西ボルネオと海域東南アジアないしマレー世界の二者に限定され、「ライバル」たりうる北ボルネオ諸港市が視野に入っていないなど、生態空間の設定の面で不満が残っている。王権と経済や軍事をめぐって掘り下げが浅い点や史料の性格に関して説明不足な点が散見する。とはいえ、それらは部分的な瑕疵であり、本論文のきわめて新しい成果、学界への貢献の全体をそこなうものではない。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。